
*転・前編

「でも、世界は違っても、頼まれた品物は届けなきゃいけない」

アルⅡイクシルはカサカサと草をかき分け、パキパキと小枝を踏み付け、ぶつぶつ呟いていた。

「しっかし、これは『乙女の泉』というより、『魔女の森』だな」

鬱蒼とした木々の中を歩いていると、豊かな滋味の証たる陰樹の枝すら、己を絡めとる緑の触手に思えてくる。それはアルⅡイクシルが広い屋敷の中から、あまり出されずに育ったからか、あるいはここが鵬翦の森だからか、アルⅡカマルの話信じているからか……。

アルⅡカマルには縁を切るように言われたが、師匠の命に背くわけにもいかない。それに実際に絶縁するか否かはともかく、この手の事務的な作業は付き合いのうちに入るまい。そう自分に言い聞かせているものの、彼女に会いに行くのだと思うと、いつの間にか、表情が強張っていることにアルⅡイクシルは気づいていた。アルⅡカマルの言う通り、十二の時に——その意味するところは違っても——同じウルルに入ってから、この四年、彼女と接する機会は減っていく一方だった。二人には最初から、大学府と小学府という大きな差があったし、鵬翦が上に翔け上っていくのに対し、アルⅡイクシルは下で蹲っているのみだった。自然と二人の距離は開いていった。

——いや、この緊張は疎遠ゆえではないな。元々、僕は阿翦と相対する時はいつも緊張していた気がする。彼女はアルⅡカマルのように気楽に付き合える人間じゃないんだ。

己の不安を蹴散らすように、アルⅡイクシルは歩みを強めた。その分、草木が少年の四肢に絡みつく割合も増える。もつとも、それこそ、身に纏う神御衣の本領が発揮されるというものだ。精霊を結晶化させる過程で、着衣向き形質を獲得させているので、神御衣は防塵、耐刃効果にも優れている。どれだけ鋭い枝や棘もやってきても、少年の肌までは決して届かない。

——それに……。
と、考え、アルⅡイクシルは祝詞を紡いだ。

『……風の裏の昴、星の裏の夕風、万成すもの、いと小さきものよ。我が希い故に、我が手に集え。我が望み故に、我が標を成せ。未だ見えざる我が道を開け』

次に、アルⅡイクシルは「風の通り道」を示すように腕を伸ばす。

『……『希望故に道あり』』

そして、言霊を結んだ瞬間、巫術が発現する。すなわち、突如として、一陣の風が巻き起こる。その風は行く手を阻む木の枝や草の葉を、立ち塞がっていた薄暗い障害の数々を、その悉くを捻じ曲げる。文字通り少年の腕の先にある少年の進むべき道を切り開く。

元々、アルⅡイクシルの干渉力はでたらめに低い。が、大氣中に浮遊している精霊との相性や、それによる空気構成分子の巨視的運動の構築才覚には秀でている。真剣に言語巫術へ集中すれば、ミンガⅡラマが自分の論文を塵箱に投げ捨てる時に使った技術を拡大応用することも、それ程難しくはない。アルⅡイクシルは精霊に風を造らせ、草木をたゆたわせ、己が通りやすい道を作ったのだ。しかし、これは……。

「意外と、精霊密度が高いのか……あるいは……？」

アルⅡイクシルはちよつと驚いた。即興で組み上げた祝詞であったのに、想定していたよりも効果が大きかったのだ。これなら、同じ祝詞で全力を費やせば、アルⅡイクシルの干渉力でも小枝を折ることぐらいは出来たかもしれない。何しろ『ちよつと見通しをよく出来るかな』という程度の気持ちで使った巫術で、目的地までの視界が一気に開かれてしまったのだ。

既に緑の群れの向こうには小さな家屋が見えていた。あれこそが鵬翦の現在の自宅である。一見すると質素な小屋暮らしに思える。だが、ある意味、とんでもない贅沢を彼女が行っていることをアルⅡイクシルは知っていた。鵬翦の所有物なのはあの家屋だけではないのだ。

ここは帝都ムンダペレから、北北東に約五フアルサク（約三十キロ）、《乙女の泉》^{アイン・アルアドラ}第三地区八番地。そして、この未開の原生林地帯は丸ごと鵬翦の所有物なのである。

すつと、小さな人影が現れた。

それはアルⅡイクシルがその家屋まであと二十歩というところだ。木陰に隠れていたのだろうか、アルⅡイクシルはまるでその存在に気付かなかった。

その人影は少女^{ファクイト}だった。だが、鵬翦ではない。

鉈を右手に持った齡十三のアリフ（アツザフル語の第一文字「Ḥ」の単独形。『すらりとした』の直喩）の如き少女だった。最も長いところが顎の辺りまでのかなり不揃いな黒髪を具え、ぎらつく瀝青炭のような眼は少年への敵意を剥き出しにしている。

たしか、彼女の名は———と思ひ出そうとして、アルⅡイクシルは戸惑った。鵬翦に何度か聞いた覚えはあるのだが、またもや、すつかり忘れている。いい加減、この人の顔と名前をすぐ忘れる癖というか、初めから覚えようとしないう性質は直さなくてはと思う。

「ええと、アブタⅡフェンチェン……？」

恐る恐るアルⅡイクシルは少女に声をかけた。少女の名前は忘れてしまったが、少女が鵬翦の買った奴隷であることは覚えている。鵬翦の買った奴隷^{アフト}であり、この場合、相手は少女なのだから———服の上からではどれだけ眺めてもわからないが、確か女の子だと説明を受けた気がするので———^{アフト}abdaの女性形で^{アブダ}abda、だから、とりあえず、^{アブダ}abdaの奴隷と呼びかけてみる。

すると、そのアブタ^{II}フェンチェン（仮）は少年に対し、右手で鉈をまるで刀剣の様に構えつつ、左手は懐にやった。いつでも暗器を（実際に持っているかどうかはわからないが）繰り出せるような姿勢である。そして、その上で少女は口を開き、幼く、高く、だが硬質な声を紡いだ。

「何か御用ですか、アル^{II}イクシル殿」

——相変わらず、嫌われているな。

苦笑いをしつつ、アル^{II}イクシルは降参の意を示すように両手を上げた。ここは既に鵬翦の私有地だ。もし、何かあっても、アル^{II}イクシルの口を塞いでしまえば『強盗未遂の不法侵入者に対し正当防衛を以って応じた』という主張が通る。そんな可能性を眼前の奴隷少女は真剣に検討しているに違いない。ついでにいえば、アル^{II}イクシルの身体能力は下の下だ。体術の類の心得はまったくなく、何と言っても空拳徒手だった。

勿論、帝国の治安は今やかなりの水準が保たれている。出合い頭にこの様な危険なやり取りをすることは非常識である。ただし、ここは前述の通り『^{ガール・アルシヤイター}魔女の森』だ。常識が通用する世界ではない。特にこの奴隷少女を見る度にその思いは強くなる。

少女はこの辺りでは珍しい旗袍^{チーパオ}と呼ばれる東方遊牧民の服飾を纏っていた。元々が馬に乗り、家畜や獲物を追いかけるためのものであり、上着の袍に腰の辺りまで深い切込みが入っている。そのため、特に脚の動きが妨げられず、動きやすい。たしか普通は両股を通す狭い筒状の下穿きを着ける筈だった。が、何故か彼女はその部分を素肌の上からさらしをぐるぐる巻きにすることで補っていた（輸入品でなかなか手に入らないのだろうか？）。

まあ、それはいい。たしかに奇妙な服飾ではあるものの、多文化主義のアッザフル帝国では奇妙な服飾など山の様に存在する。

それでも、アル^{II}イクシルが見過ごせないのは彼女の首元だった。より正確にはそこで鈍色に光り、この奴隷少女の首を包み込んでいる輪——首輪だった。

たしかに奴隷に対して、その所有権の証を求める習慣は珍しくない。だが、その多くがアッザフルでは過去のものであるし、その過去のものでも、ここまで露骨な主張をアル^{II}イクシルは知らない。しかも、よく見ると、その首輪は家畜に用いられるものと同種であり、今までは利用されていないが、鎖を繋ぐための突起まで付いていた。その上、その首輪の側面にはこれが奴隷であり、かつ、これに関してのすべての権利一切は所有者のものであるとの記述と、その所有者の名が明々と刻み込まれている。

旗袍^{チーパオ}については少女の趣味だと納得できないこともない。しかし、こればかりはこの少女の意思ではあるまい。その首筋を拘束する金属の輪は、明らかに少女に息苦しさを与えているはずだ。また、奴隷の頭の動きに遮る重々しさはその首輪が形式ではなく、実質的な拘束力を備えている証でもある。わざわざ、異国の旗袍^{チーパオ}を着込んで、動きやすさを確保している少女がその機能性を犠牲にしてまで、首輪など身に付けるだろうか？

少女の所有者たる彼女[・]の趣味だと考えた方ははるかに納得がいく。

——こりや、魔女呼ばわりもされるよなあ……。

アルⅡイクシルが苦々しきを感じていると、アブタⅡフェンチェンが痺れを切らす。

「御用の旨を仰っていただけると当方としても、大変助かるのですが……」

その声音は言葉の中身とは裏腹に極めて刺々しいものであった。しかし、同時に大変綺麗な正則語^{フスハー}でもある。アルⅡイクシル自身もお手本にしたいくらいだった。そんな風に少しばかり聞き惚れていると、少年は眼前の少女の事情について思い出した。

そうだった。この奴隷は本来『姫様』^{アミミラ}と呼ばれる少女なのだ。故にこそ、奴隷でありながら、ここまで綺麗な発音をするのである。正確には、彼女こそかつて『乙女の泉のお姫さま』^{アミミラアイン・アルⅡアドラ}と呼ばれた存在、すなわち、この『乙女の泉』^{アイン・アルⅡアドラ}一帯に封ぜられていた貴人の娘なのだ。

旧貴族——旧世襲制巫術師——階級は、あの革命によって、その多くは放逐されている。しかし、そのすべてが放逐されたわけではない。たしかに丞相である祝融は彼女達の力を削り取るうと腐心していた。だが、あの革命において、そのごく初期から狂王ではなく勇者に付いた貴族階級も少なくはなく、そんな彼女達への待遇には祝融も配慮をせざるをえなかった。アブタⅡフェンチェンの一族もその類である。したがって、彼女の実家は未だにかなりの家格と財産を維持している。それに加え、元々、結構な善政を行っていたらしく、この時代には珍しく（複雑なものが混じっているもの）民衆からの一定の信望や尊敬を堅持している。

で、ちょっと前にそんなアブタⅡフェンチェンの実家から、鵬翦はこの地——『乙女の泉』^{アイン・アルⅡアドラ}第十三地区八番地を買い取った。勿論、数々の学術上の功績で得た資金を使ってである。しかし、何故、鵬翦がこんな森林ばかりの土地を買い取ったのか？おそらくは彼女の嗜好によるものだと思うれるが、ひよつとしたら、人を寄せ付けずに好き勝手に振舞える空間が欲しかったのかもしれない。そういった欲求は生粋の探究士ならば、多かれ少なかれ、誰もが持っているし、アルⅡカマルからの話を鑑みれば、その可能性はさらに高まる。とはいえ、これらも単なる推測に過ぎないわけで、やはり、本当のところは鵬翦本人にはわからない。わからないといえ、この土地を売ったアブタⅡフェンチェンの実家の事情もよくわからない。前述の通り、経済的に困窮していたわけでもあるまい。この土地を原生林のまま、放っておいたのは、ここが田舎であったということも一因であろう。だが、今の今まで、まったく木々を切ろうとせず、人の手を入れさせなかった真の理由は宗教的なものであったはずだ。信心深い旧世襲制巫術師にはよくある話である。それを何故急に十六の小娘に売る気になったのか？

鵬翦にこの地の木々を切り倒す気がなかったことが理由かもしれない。実際、彼女は自分が生活するだけの空間を確保した後、この森に手をつけていない。おかげで、アルⅡイクシルはここまで歩いてくるのに、こんなに苦勞する羽目になった。しかし、もっとも確実に

この森を守ることを考えれば、そもそも、他者に売らなければいいような気がする。そうすれば、この地の木々を一本たりとも傷つけられることはないのである。

第一、鵬翦が提示できた金額は、探究士の資金としては破格であったろうが、大土地所有者である貴人に見れば、それ程のものではなかったはずだ。

しかし、もつとわからないのは、その時、鵬翦がこの森のついでに買い取ったもの——すなわちこの地の元所有者の娘であり、《乙女の泉のお姫さま》^{アミール・アッイン・アル・アドラ}であるはずの少女であり、今、アル・イクシルの前にいる《鵬翦の奴隷》^{アブタール・フェンチェン}についてである。

当たり前だが、彼女の実家に娘を奴隷に売り出す理由など、まったく聞かない。何せ、彼女の実家には家族そろって働かず遊んで暮らせるだけの金が百年分はある。

アブタール・フェンチェンが『使用人として』として鵬翦に仕えているのなら、わからないでもない。社会勉強のために、貴人の娘が、どこかの馬の骨ともわからない出ではあるが、年齢十五でこの帝国屈指の探究士となった才女の下で働く。いかにもありそうな話である。

しかし、二人の関係はあくまでも奴隷とその所有者であった。《乙女の泉のお姫さま》^{アミール・アッイン・アル・アドラ}はこれまでいっても、《鵬翦の奴隷》^{アブタール・フェンチェン}であり、自由人としての権利一切を剥奪され、身も心もあの魔女に捧げきっている。

何故、この様な奇妙な事態になっているのか、当初、アル・イクシルは酷く困惑したものだ。しかし、最近になって、その理由がわかってきた気がする（と、同時にアル・イクシルはここまでわかっているのに何故、肝心のこの少女の名前を思い出せないのだろうか、訝しがった）。

まず、この少女が相当の変わり者であることが一つの理由だろう。先に記したように彼女は髪が短い。しかも、その手入れが浅そうである。不揃いで、ひよつとしたら、自分で切っているのかもしれない。……これだけでも、この少女の異質さがわかる。一般に旧世襲制巫術師階級は髪を重んじ、長く伸ばす。それは素朴な美しさの研磨や、非肉体労働階級であるという言外の文化的主張のためだけではない。空气中の精霊との接触面積の増大や精霊の体内置換寄生部分の確保という必要からきているのだ。だから、旧世襲制巫術師階級——正確にはすべての巫術師にとって、長く美しい髪は維持は必然であるはずなのだ。そういった長年の経験に基づく慣習をこの奴隷の少女は嘲うかの如く、ばつさりと切り捨てている。それだけで、尋常な少女ではない。

そして、もう一つの理由はアブタール・フェンチェンの鵬翦に対する特別な感情だ。要するにこの奴隷少女はあの黒衣の魔女を尊敬というか、憧憬というか、ほとんど崇拜しているのだ。いや、恋慕といってもいいかもしれない。正直、わからないでもない。鵬翦の才気にはそれだけのものがある。あの傲慢さ、酷薄さも、この尋常ならざる少女にとっては魅惑の果実なのかもしれない。

つまり、この少女が鵬翦の奴隷^{アブタール・フェンチェン}であるのは、少女自身の意思なのだ。勿論、この少女が自

ら、奴隷になりたいと口にしたのか、どうかはわからない。ひよっとしたら、最初は侍女として、側においてくれと望んだだけなのかもしれない。だだ、仮にそうであっても、鵬翦が奴隷たることを求めれば、魔女に魅了されきっているこの少女に、拒む術はなかったのだろう。

そんな構図が見えてくると奴隷少女が自分を嫌っている理由もわかってくる。

崇拜する鵬翦にすべてを捧げているアブダ^{アブダ}フエンチェン^{フエンチェン}にしてみれば、アル^{アル}イクシル^{イクシル}の様な男が主人と付き合うのが気に食わないのだろう。だから、侮蔑と中傷と嫌悪を隠そうともしない。無理もない。たしかに才覚という意味ではアル^{アル}イクシル^{イクシル}は鵬翦の足元にも及ばない。前述の通り鵬翦は人に序列を付けて接する人種であるが、アブタ^{アブタ}フエンチェン^{フエンチェン}も同類なのだろう。だから、己が文字通りの鵬翦^{アブダ}の奴隷であることに満足しているのだ。そして、それ故に『身の程を知らない』アル^{アル}イクシル^{イクシル}が気に食わないに違いない。

それに――。

彼女は自ら望んで服従し、鵬翦^{アブダ}の奴隷となった少女である。かつて、あくまでも奴隷であることを拒み続け、それ故に愚者^{マジュスレ}と呼ばれていた少年とは根本的に相容れない者同士なのかもしれない。

「アル^{アル}イクシル^{イクシル}殿？」

「ああ、すまない」そして、アル^{アル}イクシル^{イクシル}はこの奴隷の名前を思い出すことを諦めた。「…：阿翦はいるかい？」

その瞬間、アブタ^{アブタ}フエンチェン^{フエンチェン}の嫌悪感と冷静さと酷薄さから、後二者が消え失せる。少年の言葉を噛み締めるのに時間がかかったのだろう。怒りが露になるのは一泊置いた後だった。

「ご主人様の御名をっ……」

「おや」何故か、アル^{アル}イクシル^{イクシル}の態度は嫌味つたらしくなった。自分は苛立っているのかと内心自問していた。「不快かい、彼女の真名を僕が口にするのは？」

「当然ですっ。諱を口にするなどっ。まして、女性の……！」

なるほど、今や、ラフマーンや祝融ですら、鵬翦への呼びかけには字の『雛子』を、あるいは氏に字をつけた『鵬雛子』を用いる。《^{アル}黒^{シャイター}衣^{ナーカ}の^{カバ}魔^{バー}女^{アスワド}》に媚び諂う者の中には『鳳雛先生』とまで呼ぶものまでいる。諱の『翦』を含む小字である『阿翦』というアル^{アル}イクシル^{イクシル}の呼びかけは、いかに幼馴染といえども、かなり特異な部類に属し、アブタ^{アブタ}フエンチェン^{フエンチェン}の怒りを誘うに十分だろう。

そもそも、鵬翦は偉大な探究士の一人であるのに対し、アル^{アル}イクシル^{イクシル}はおちこぼれの学生であるのだ。鵬翦^{アブダ}の奴隷^{フエンチェン}が言葉の上だけとはいえ、礼節を以って相対している以上、公平に見て、無礼なのはアル^{アル}イクシル^{イクシル}の方だ。たしかにアブタ^{アブタ}フエンチェン^{フエンチェン}の態度とて、まともではない。だが、アル^{アル}イクシル^{イクシル}の側にも非があるのならば、まず、自らを改めた上で、

それを正すべきだ。日頃の自分なら、自然に従っているそんな道理が少年の脳裏に浮かぶ。だが、今日のアル||イクシルには、何故か、それがとてつもなく忌むべきことに思えて仕方なかった。形の上だけでも、言葉遣いを改めようという気にはまったくなれなかった。

「僕の彼女に対する呼称については……」アル||イクシルは冷酷に断じた。「……一介の奴隷である君が口を挟むべき問題ではない」

予想通り、この物言いにアブタ||フェンチェンも眼が爆ぜんばかりの激昂した。奴隷少女は右手の鉞を大きく振りかぶり……。

「僕の師匠から君の主への封筒を、僕は運びにきた。彼女はどこだ？」

……続くアル||イクシルの一言で、その動きを止めた。

「僕の師匠、すなわち、ウルルの長シヤイフ・アル||ウルルにして、帝国学会第一先導者マルジャエ||タクリードからの封筒を僕が預かっている。どうやら、その意味はわかるらしいな」

——僕は今、相当嫌な奴だな……。

そう思いつつ、アル||イクシルは嘲った。

アブタ||フェンチェンは短気であっても、短慮ではない。シヤイフ・アル||ウルルの長、帝国学会第一先導者であるミンガ||ラマからの封筒。それを失うことは鵬翦にとつても損失となる。その程度の推察はできるらしい。

そして、この奴隷少女は己の感情よりも主への忠誠を重んじたのだろう。

怒りを抑えるためか、アブタ||フェンチェンは一度大きく息を吸った。そして、右手の鉞を下ろし、左手も懐から離し、般若の如き内面と表情とは反対に声音を冷静さで塗り固めた。

「かしこまりました」

「わかってもらえて嬉しいよ。で、彼女はどこだい？」

「残念ながら、お教えするわけには参りません」

「……………理由は？」

「あなたさまは男です」寡黙な奴隷の影から、苛烈な貞操観念の姿がひょっこり顔を出した。「しかも、十代半ばという一度異性に接近すれば、必ずや本能的肉体的性衝動から一種狂的な動物状態になる思春期男子です」

「……いや、流石にそういう経験はないんだけど……」

少年のささやかな抗議は少女の必死の剣幕に圧倒されていた。

「はつきり、申し上げます。今、ご主人様は手首の先や御髪すらも露出されておられるのです。そんな状態を殿方に見せるわけにはいきません」

「……………あのさ、そんなことを言ったらって、今までは……」

「はい。ですが、そろそろご主人様もそういった悪癖を改めるべきなのです」

アル||イクシルがうっかり黙り込んでしまったのは相手が本気で言っているのだと気づいたからだ。その上、アブタ||フェンチェンはこの世で最も嫌っているであろう男になんと頭

を下げた。おぞましさに身震いしながら、奴隷少女は頭を下げた。

「こちらの都合によるわがままでということは重々承知の上です。では、ありますが、何かあつてからでは遅いのです。危機回避のための物理的隔絶は必須なのです」

「……君さ、ひよつとして、啓典つて読んだことある？第二十四章御光アル・ヌールの三十一節辺り」

「……は？」

「いや、父さんがそういうこと書いてある本が大好きでね」幼い日を思い出し、アル・イクシルは思わず苦笑いをこぼした。「しかし、阿翦はその本に書いてあることがそれ程は好きではなかったと思うよ。勿論、その服飾規定に関しても……」

「……また、ご主人様の諱を……！」

アブタ・フェンチェンは鋭い眼差しでこちらを睨む。

アル・イクシルは舌打ちした。それでも奴隷少女の意思を尊重し、少年なりに諱を口にせぬように心を配っていた。が、気が緩むとついあの小字が出てしまう。

「言っておくけれど、僕だつて、別に彼女を辱めようと諱を口に行っているわけじゃないんだよ」

「妙齢の女性の諱を口にする——これを辱めと言わずになんというのですか。まして、乙女の真名を……」

奴隷少女の保守的発言をアル・イクシルは辟易して聞いていた。が、一箇所、心惹かれるところがあり、素朴な疑問をぶつけていた。

「……乙女なの？」

「乙女なのです。それはもうまったくの穢れのなき清らかな乙女なのです」奴隷少女が先程下ろした鈍の握り方を微妙に変化させた。「……それとも、何か心当たりでも？」

「いや、別に……」

もし、身に覚えがあるなどと答えれば、今度こそ、僕は首を刎ねられるな——と思ったので、とりあえず、軽口を叩くのをやめておくことにした。まして、実は一時期、父との関係を疑ったことがあるなど、言えるわけがない。一応、家庭環境を考慮したアル・イクシルが、鵬翦を疑うことすらしなない無邪気で無防備な父を啓典にある姦通罪から守るために、影に日向に苦勞していたのだ。そう考えると、何だか、無性に苛々してきた。

「……わかったよ。小字や氏名で呼ぶのが嫌ならちゃんと字姓で雛子チー・チー姫ヒナコヒメとでも呼ぼうか？」

「……ヒナコヒメ？」

「おっと、君は知らないことなのか……失礼、僕の配慮が足りなかった。たしかにあの阿翦が奴隷ア・カなんぞに余計なことを話すわけがないな」

そう言つて、アブタ・フェンチェンは見せ付けるように嘲う。奴隷少女の中で蠢いていた激情が再び、巻き上がる。アル・イクシルの稚拙な挑発にギリギリと歯軋りがしそうな位に

アブターフェンチェンは顔を歪め……、だが、突如、そこで。

「ごっ、ごっ、ご主人様……」

今までの硬質な印象を覆す幼い少女らしい声音が響く。その上で、アブターフェンチェンは急に頬を染めた。そう、奴隷少女の視線の先に彼女が現れたのだ。

——阿翦……いや、今は鵬翦か……。

「ウマイヤ、そんな男に構うのは後になさい」

希代絶世の天才探究士——鵬翦、ヒナコヒメ、鵬雛子、雛子姫、オオトリノヤバネヒメノミコト——すなわち《黒^{アルシヤイターナフ・カハ！アズワト}衣の魔女》。彼女は右手に黒光りする大きな鎌を持ち、その柄でトントンと自らの肩を叩いていた。

「せっかく二人がかりでやっているんだから。庭の手入れは午後までに終わらせるわよ」

そして、鵬翦は奴隷少女を舐め回すように視線で一撫でする。それも、あの黒洞の双眸ですると少女の脊髄に得体の知れないものが流れたらしい。アブターフェンチェンは身震いし、

「は、はい」と、その場に崩れ落ちる。

すると、魔女は溜め息一つ吐いて、何事もなかった様に手近な雑草を刈り始めた。主人には《小さな雌^{ウマイ}奴隷》と呼ばれているらしい鵬翦の奴隷も、しばらくして立ち上がる。薄く頬を染め、慌てて、本来の作業であるらしい薪割りに走ったのは言うまでもない。

それっきり、鵬翦は幼馴染の少年のことなど眼中にないように、黙々と鎌を振り上げては、振り下ろす動作を繰り返す。それは雑草を刈るための大鎌であり、行いであった。だが、この黒衣の魔女は、どんな時でも、今と同じように大鎌を振り下ろせるに違いない。たとえ、足元にあるのが生きている人間の首であっても……。

アルイクシルはふとそんな風に思った。

元々、黒系統の色彩を好んだ彼女であったが、暝天を思わせる漆黒の法衣に全身を包むようになってからは、まさしく黒尽くめであった。たしかに手や首から先には水面に映える月の様な白皙の玉肌がぬらりと覗いている。だが、腰まで届く流水のように癖のない闇色の髪がその多くを隠していた。明るいい色といえば、その髪を束ねている赤一色の大きな飾り布ぐらいいだ。ここだけはこの魔女が実は齢十六の少女であることを思い出させる。しかし、十六の乙女が飾り布で髪を束ねれば、それなりに可憐さが引き立つはずなのだが、この魔女の前には完全に霞んでしまっていた。いや、むしろ、闇の中に狂い咲いた徒花——それも食虫花の歪な巨大さと真紅の不気味な美しさである。

「で、何の用かしら、ディアウス」

草刈とその後の湯浴みを終えるまで、アルイクシルは質素な一室で椅子に座らされていた。書物で時間を潰させられながら、待たせていたのである。

そして、鵬翦は少年を通称クシヤであるアルⅡイクシルではなく、名前イスマであるディアウスと呼んだ。

ほらみる——という気がして、アブタⅡフェンチェンに視線をやる。すると、彼女は忌々しさを必死に堪えている様子だった。

勿論、鵬翦の声に幼馴染への親しみは欠片もない。彼女がアルⅡイクシル・ディアウスの名前イスマを呼ぶのは、単に見下しているからであり、わざわざ、通称クシヤや血称ナサツを呼ぶまでもないと考えているからだ。……とはいえ、それでも名前イスマを呼ばれているという事実は《小さな雌メ奴隷イヤ》と呼ばれている少女への優越感を生み出すし、アルⅡイクシルが鵬翦の諱を呼ぶ根拠の一つともなる。

付け加えれば、上記の姿の鵬翦は言うまでもなく、手首テの先ノや髪カミすらも露ヌ出デしているのだ。しかも、湯上りであるゆえに、その肌も髪も湿り気を帯びて、しっとりとしており、細く初々しい首の辺りからは、ほのかに石鹸の香りが漂ってくる。特に後者は——何だかちよつと悔しいが——大きな魅力となっており、それだけにうら若い乙女としての鵬翦を引き立てている。こんな状態の鵬翦を『一度異性に接近すれば、必ずや本能的肉体的性衝動から一種狂的な動物状態になる思春期男子』であるらしいアルⅡイクシルの目にさらすことはアブタⅡフェンチェンの気に食わないに決まっている。しかし、所有物であるアブタⅡフェンチェンに鵬翦の行動を止められるわけもなく、鵬翦がアブタⅡフェンチェンの主張するほどの貞操観念を持ち合わせているわけでもない。何より、鵬翦が奴隷に意見など求めるわけがないのだ。奴隷少女の苦々しい表情を垣間見、アルⅡイクシルは『いい気味だ』という想いがよぎった。

すると、鵬翦は愉快そうに眼を細める。

「そうそう、知らなかったわ。あなたが幼女嗜好で加虐趣味だったなんて」

幼子にちよつかいを出すのがそんなに面白いの？

そう言われているのだと気付いて、アルⅡイクシルは思わず赤面した。

「悪かった」大幅に省略した上で、少年は謝罪する。奴隷の少女がどんな顔をしているのか気にはなつたが、一瞥もせずなさつさと封筒を取り出した。「師匠からだ」

互いに椅子に座つたまま、鵬翦はアルⅡイクシルから、封筒を受け取った。そして、周囲には誰もいないかのごとく、乱雑に封を切り、中にあった紙束の一枚を取り出し、大雑把に眼を通した。すぐに彼女はクスリと品よく微笑む。そして、童女のような無邪気さで、その紙をひらひらとさせた。

「見たい？」

「いや」

その幼馴染の態度に何か空恐ろしいものを感じて、アルⅡイクシルは思わず目線を逸らした。

「そう？」ちよつとがっかりといった様子の鵬翦。

「……それより、錬金術でも始めるのか？」

話題を変えたくなくて、アルⅡイクシルは尋ねた。もつとも唐突でもなければ、無意味でもない。アルⅡカマルの話もあったし、この客室に通され、鵬翦を待つ間に、瓶詰めされた多種多様な薬品類、硝子容器に試験管、ばね秤に、天秤、計量匙……等々、いかにもな器具がこの魔女の住処に並んでいるのを目にしたのだ。

「失礼ね。『化学』と呼んで欲しいわ」近年急速に確立されつつある新しい概念を鵬翦は口にした。「知っているでしょ。元々、私はこっちの方が好きだったのよ。ようやくといったころね」

「……どういふことだ？」

「だから、やつと生化学分野に本腰を入れられるといっているの」

「……数学は？」

「ああ、勿論、そつちも続けるわよ。まだ、やり残した事もあるし」

「その言い方だとまるで、数学から転向するみたいじゃないか……」

「そう言えないこともないかしら」

当然のように語る鵬翦にアルⅡイクシルは啞然とした。たしかに鵬翦は幼い時から、生化学分野が好きだった。そのことはアルⅡイクシルも覚えていているし、実際、鵬翦はその分野でも成果を上げている。しかし、これまでの実績を鑑みれば、やはり、鵬翦は数学主体と言わざるをえない。だから、てつきり、鵬翦は数学が好きなのだとアルⅡイクシルは思っていたし、この先も数学を続けるものだと思っていた。いや、アルⅡイクシルだけではない。鵬翦を知るものならば、誰もが同じことを考えているに違いない。しかし、それは……。

「今までの積み重ねを捨てるというのか？」

この時代、学問はそれ程、専門化はしていない。一般には生物も化学も数学も『自然哲学』と十把一絡げに捉えられている。しかし、それでも、最前線を走っている者たちには、その違いが確固たるものになりつつあった。

「ああ、そうね」

考えてもいなかった——という鵬翦の態度にアルⅡイクシルは苛立った。

「でも、私はやっぱり化学がやりたいのよ。今までは硝子試験管一つ買うのにも、一苦労だったから、我慢していたけれどね」アルⅡイクシルそう言って、アルⅡカマー！ムスマト齡十六の乙女は己の纏う無地の法衣を無邪気にひらひらさせる。「さすがにこの《黒》は偉大ね。いいわよ、最高階位は。皇帝直属の真骨頂といったところかしら。何もしなくても、お金が集まってくる。資金不足で出来なかったことも、これからは好き勝手に出来る」

「金がなかったから、出来なかった……って、そんなの……」

そこで、アルⅡイクシルは言葉につまった。

たしかに鵬翦の言う通りだ。生化学は実験のための設備、環境を用意するのに金がかかる。だが、数学は筆と紙さえあれば出来る。何の実績もない小娘が身を立てようとすれば、どちらを選ぶべきかは明白だろう。

しかし、しかしである。

これでは、まるで鵬翦は初めから数学を己の通過点、踏み台としか捕らえていないようではないか！

数学にすべてを費やそうとしている探究士にしてみれば、これほど許しがたく、悔しいことはない。この頃、数学を己の主体と考えていたアル||イクシルもその一人である。

だが、悔しさの根源、アル||イクシルのような人間が憤る理由、彼女の侮辱を受け流せない原因、それは何よりもまず己自身がその数学で成果を出していないという厳然たる事実にある。

対する鵬翦は通過点、踏み台でしかない数学で、空前絶後の成果をあげているのだ。それに……。

「『そんなの父さんに頼めばよかったじゃないか！』……とでも言いたかったの？」

犬を見る目の魔女はアル||イクシルが口に出す寸前だった言葉を補う。

「僕は……別に……」

思わず、声を上げたアル||イクシルであったが、その後続ける言葉がなかった。鵬翦は『何か言いたいのなら、どうぞ』と言わんばかりに瞑目し、閉口する。だが、アル||イクシルにとって、その沈黙が力であった。反論など出来るわけもない。鵬翦はウルルに行った後、寮生活を希望した。幼い日のアル||イクシルはそれに倣い、そして、今でもウルルの寮にいる。しかし、生活費は完全に父からの仕送りに頼っている。対する鵬翦は既に《黒衣》として得た資金で、前述のように、土地を買い、自宅を建て、奴隷まで仕入れ、自活して、その上、研究費の獲得に努めている。生活費はおろか、学術書や実験器具が欲しくなる度、当然のように父を頼っているアル||イクシルが鵬翦に反論できるわけがなかった。

「別に恥じることもないでしょう」

アル||イクシルの言葉が続かないのを確認してから、鵬翦は目を見開いて、微笑んだ。あの初めての時から変わらぬ蛇の笑みだ。

「弱者が強者に寄生する——いいんじゃない。祝融様が目指す社会のあるべき姿だと思っわ」
屈辱、いや、情けなさか。いずれにせよ、アル||イクシルは身を振るわせた。

「それにね、正直、才能の限界も感じているのよ。今はいいけれど、十年後、私は数学を続けられるかしら」

鵬翦にしてみれば、これは率直な自嘲だったのだろう。

この《黒衣アル||シヤイナァ・カパー・アズド》の魔女は若くして、数学における多大な実績を上げた。だが、それは若さ故の実績といえなくもない。数学は若い人間が革新的な成果をあげやすい分野である

ものの、同時に若い人間でなければ革新的な成果は出しにくい分野でもある(勿論、鵬翦の若さは異常であったが)。完全な先験性に基づく純粹論理たる数学に対し、理論上、後驗的な人生経験は用をなさない。年輪を重ねる利点は『経験』を重ねられる点にあるというのに、数学においては、その『経験』が役に立たないのだ。そのため、年輪を重ねるということは知的、肉体的活力の低下という不利益でしかないだろう。勿論、例外も多い。しかし、俯瞰してみれば、この原則は概ね正しく、これまで数学上の偉大な発見の多くは、十代二十代の若者によってなされている。ミンガラムも(彼にしたところで、まだ三十だが)その数学分野における成果の多くは十代の頃に気ままに書き綴っていたものを、歳を経てから論文にまとめるという形が多く、その基礎はやはり十代の頃のものである。逆にいえば、かのミンガラムですら、もう数学的創造性の多くを失っているといえ、現在では数学以外の分野、あるいは数学であつても、過去あるいは他者の成果の補完的な研究に従事している。ひよつとしたら、ミンガラムがああ性格で、なんだかんだといつて教務者や学校運営者の役割を担っているのも、そのためかもしれない。そして、それを見ている鵬翦が己の数学的才能の枯渇を危惧するのは無理ない話かもしれない。

とはいえ、アルイクシルにしてみれば……。

——では、同い年の自分はどうなるのだ？

……という思いを抱かざるをえない。今まで、アルイクシルは数学で大した成果をあげていない。だからこそ、『これから』を考えているのだ。先のアルカマルへの発言にもそれが滲み出ていた。にも、関わらず、鵬翦は『これから』自分は年齢的に減衰していく一方であるという。勿論、これは鵬翦の自身に対する判断であり、アルイクシルが云々言うことではない。しかし、もはや《黒》アルカマルである鵬翦の発言には、自然と重みが出てくる。自嘲ですら、そこに権威が生じるのだ。

すなわち——アルイクシルはもはや『これから』を期待すべきではないというのか！

「それで……例の人体実験云々の話か？」

ねつとりと蠢く何かに突き動かされて、アルイクシルは声を出していた。眼前の鵬翦はきよとんと歳相応の表情を作った。その表情に、アルイクシルは苛立った。その後ろめたさの欠片もない表情に苛立ったのだ。本来なら、ここで、後ろめたさを感じさせない鵬翦にアルイクシルは安心すべきなのだ。鵬翦は人体実験の話も平然としている。つまり、そのことを知らない。アルカマルの話はやはり所詮噂話であつたのだ……と。

しかし、この魔女に限れば、実際に人体実験に関与していても、今と同じ態度をとるに違いない。そう自分に思わせる幼馴染に苛立った。

「噂さ。鵬雛子が生物兵器の人体実験をやるうとしているというね」

言葉を繋げると、鵬翦はしばらくしてから、小娘のようにキャハハッと笑い出した。アルイクシルが渋い思いで黙っている中、鵬翦は笑い転げていた。彼女は涙を拭いて、幼馴染

に問いかけた。

「それで？あなたは信じたの？その噂を？」

「問題はこの噂だけじゃない。人の受け売りだがね。僕はこの噂を一笑に付せなかった——それこそが問題なんだ。」

「なるほど」こんどは魔女らしくニヤリとする鵬翦。「その人って、あなたの『お・と・も・だ・ち』の、アルⅡカマルかしら？」

「……ああ、それがどうした」

アルⅡイクシルはいささかたじろいだ。一つは鵬翦が自分とアルⅡカマルの友誼を知っていたことに、だ。正直、あの鵬翦が、自分たちのことを気にかけてとは思えなかった。もう一つは、その言葉を述べたのがアルⅡカマルだと何故わかったのかである。たしかにアルⅡイクシルの交際は広くはない。だが、それでも、個人名まで断定できる理由はわからない。

「ヒト型精霊結晶細胞よ。多分ね、その関係」

鵬翦はニヤリとしたまま、問いとは違う答えを返した。

「ヒト型精霊結晶細胞？」聞きなれぬ単語にアルⅡイクシルは脳裏を検索し、「……東方で言う《無支祈》システムを作ろうというのか？」

「ええ」よくできましたと言わんばかりに鵬翦はにっこりとする。「最終的にはヒト型精霊結晶細胞ではなく精霊型精霊結晶細胞……言わば《變》型無支祈ではなく、《變》型無支祈にもっていききたいのだけれどね」

生物化学、特に東方系のものについては、アルⅡイクシルも精通していない。必死になって、鵬翦の言葉を噛み砕き、その意味に驚愕した。

「ちよ、ちよっと、待て」その壮大な構想に対して、思わずアルⅡイクシルは否定的な見解をとった。「現行結晶細胞は生存条件が厳しい。精密な生理食塩水が必要になるし、人間との情報連結を恒常的なものにしなくてはいけない。まして、ヒト型、精霊型ともなれば……」

「恒常性干渉源も生理食塩水の塊も、そこにあるじゃない」あまりに何気ない言い方だったので、アルⅡイクシルにはその指すところがわからなかった。「おまけに手足も生えているから、使用者が運ぶ必要もなくて便利よ」

そういって、鵬翦は奴隷の少女に眼を走らせる。でしゃばらないように影を潜めていたのだろう。今まで、その存在すら、感じさせなかったあの少女——アブタⅡフェンチェン。

——あの中に……人間の中に結晶細胞を……ヒトの中に異形を埋め込もうというのか！

アルⅡイクシルは愕然とするしかなかったが、アブタⅡフェンチェンを覗き見ると、奴隷の少女は別の感想を抱いたようだった。

こんなことを平然と言われても、彼女の主人への服従と敬愛は変わらないらしい。いや、むしろ、少女の中にある種の快感が駆け巡っているようにすら見える。鵬翦に見つめられたアブタⅡフェンチェンは、顔を真っ赤にして、モジモジと俯く。あの白刃の如き少女と同一

人物とはとても思えない。まるで恋する乙女だった。

「……禁忌だ」

力あると思われる論は組み上げられなかった。だから、アルIIイクシルは探究士として、それこそ忌むべき言葉に頼るしかなかった。だが、やはり鵬翦は嘲笑と共に一蹴する。

「その禁忌を定めた世襲制巫術師たちはもういないのよ」

もはや返すべき言葉もなく、アルIIイクシルは席を立った。議論の場において、席を先に立つのは負けた者であるといわれるが、それは事実かもしれない。そんな悔しさを嘔み締めつつ、その場を立ち去ろうとする。扉の前に立ったアルIIイクシルは最後に一応、付け加えた。

「……このことはウルルにも報告させてもらう」

「構わないけれど……」鵬翦は一步も動かず、そう付け加えた。「私は、まだ、何もしてはいないわよ。今のところ、動物実験と理論構築で精一杯なもの」

「まだ？今のところ？」

「だから、何もしてはいないのよ。それとも考えるだけで罪なのかしら？」

「……無実ではないにせよ、無罪だろうな」

この帝国の丞相祝融は生粋の法治主義者である。故に現王朝は法治国家となっている。徳治主義が心を縛り、体を解き放つのに対し、法治主義は体を縛り、心を解き放つ。だから、明文化されている具体的な犯罪行為は取り締まるが、それ以外については放任するのが基本だ。したがって、思想犯罪に関する警察力はきわめて弱く、『悪しきことを考えている』などという曖昧で理由で、誰かを裁くことは出来ない。

「だが、そんなことから、魔女と呼ばれる。そのことを覚えておいて欲しい」

「別にかまわないわよ。アルIIイクシル：カハ！アズワト黒衣の魔女——そこはかかない畏怖が感じられるじゃない」

予想通り、凡愚と見下し、超越した者の言だ。どうにもならないのか——とアルIIイクシルは扉の取っ手に手をかける。

「それにね、恒常性干渉源は根本的な解決が出来る見込みもあるのよ」

純粹なる好奇心を刺激され、アルIIイクシルは手を止めた。

「精霊を精霊への恒常性干渉源とすればいいじゃない。まあ、そのためのヒト型精霊結晶細胞であり、精霊型精霊結晶細胞なんだけどね」

「……カムガカリ《神憑り》かつ！」

アルIIイクシルは振り向き、会心の笑みを見せる鵬翦を仰ぎ見た。

「そう、《外部演算因子との情報共有による人格構築型連鎖性精霊干渉法》よ」

「あの神人たちの力を我々の力で再現できるのか……！」

「少なくとも、乗っける方のハードウェアはね。あなたも夢中になっていた非酵素型代謝系の経路図を応用すれば、なんとか目処が立ちそうよ」

「非酵素型代謝系？」

アルリイクシルには覚えがなかった。というか、酵素なしで代謝が成立するのか？人体や精霊の化学反応と相互干渉させないためにも、そういったモノが必要になるのもわかるが……。すると幼馴染の少女は柔らかに微笑む。

「黄鉄鉱よ。原始代謝系と言い変えようかしら？」

「ああ、粘土鉱物界面におけるアミノ酸の重合反応の類か？」

「そ。あれってさ、アミノ酸だけじゃなく、他の有機物や無機物も作るわよね。単純な例で言えば、鉄イオンと硫化水素があれば、自発的に水素イオンと電子を放出する——みたいに」
「界面が合成反応における鑄型の役割を果たし、結晶としての成長も促すからな」アルリイクシルの声も弾む。「しかし、黄鉄鉱の触媒作用を原始代謝系と断定するとは……。本当に君は『粘土仮説』にこだわるな。……創世の女神を気取るか？」

「創世の女神？」彼女は小首を傾げた。

「夏国神話においては女神だろ。女媧氏だっけ？泥をこねて人類を創造したのって」

「あら、いいわね。なら『女媧泥ユニット』とでも名付けようかしら？……うん、いい感じ。

いっそ筆号も『女媧』にしようかな？」

そう言った少女がニヤニヤと笑っているのにアルリイクシルはようやく気付いた。

そして——今、自分は愉しんでいた。しかもそれを見透かされ、魔女に嘲られていたのだと気づく。

「ま、さっきも言ったように、まだまだ動物実験と理論構築で精一杯だけどねえ」

「そ、そうか……」

声を荒げて、悪かったと述べ、再び去ろうとするアルリイクシルにもう一度鵬翦は声をかけた。それも、心底呆れた口調で。

「……あなたって、本当に鈍いのね。その動物実験に使う動物にヒト科ヒトがいるって、考えないの？」

三度振り返るアルリイクシル。今度はあからさまな憤怒が沸き上がる。

「ところで……」しかし、あくまでも、黒衣の魔女は椅子から動かず、己の不動を保っていた。「その噂、誰から聞いたの？」

「……どういふことだ？」

「だって、気になるもの」そう言って、鵬翦は小首を傾げる。「だって、『鵬雛子が生物兵器の人体実験をやるうとして』っていう噂、私、そんなの聞いたことない。興味深いわ。ねえ、その噂、誰から聞いたの？」

「……………」

記憶の影が蠢いた。

「いやいや、鵬雛子が生物兵器の人体実験をやるうとしているというのと、同じくらの信憑性を持つ話だぜ」

……一瞬、アルⅡカマルが何を言い出したのか、理解できなかった。

鵬雛子というのは鵬翦の氏字であり、要するにアルⅡイクシルの幼馴染のことだ。その彼女が生物兵器の人体実験……？

「ちょっと、待ってよ。何だよ、それ」

「知らないのか」アルⅡカマルはきよとんした。「有名な話だぜ？」

「……そんなことはどうでもいいだろう」

「ふうん」

意味のない、感嘆詞の相槌を打つ鵬翦。慌てて、冷静な態度を取り繕ったアルⅡイクシルであったが内心は心臓が高鳴っていた。

何故自分は素直にアルⅡカマルの名を出さないのだ。別にいいじゃないか、アルⅡカマルは噂話を面白半分にしたただけだ。アルⅡイクシルは噂話などに興味が薄いし、鵬翦などはまったく関心がないだろう。だから、アルⅡイクシルも鵬翦も知らない噂をたまたまアルⅡカマルだけが耳にしていた——それだけの話だ。

なのに、どうして、事実を述べることが出来ないのだ？

「繰り返しになるが、僕はこの噂そのものよりも、この噂が広まる下地を問題にしている」

「そんなこと言われても、私そんなの聞いたことないもん」

「もっと、他人に興味を持って。このままだとミンガⅡラマ師匠のようになるぞ」

どこかで聞いたような台詞を繰り返すアルⅡイクシルに、鵬翦は身体の疲れをとるように腕を伸ばした。

「生憎遅筆なものでね。一度、論文に取り掛かるとなかなか外に出られないのよ」

その時、無地の法衣の隙間から、十六の少女の細い腕が覗く。アルⅡイクシルは少年らしい感情を刺激され、男女の性差というものを、心底、不公平に思った。

「それに私、乙女チックなオンナノコなのよ」

「……どういう意味だ？」

「私は愛というものはただひたすらに与えるものだと考えているの。欲しがるものではなく、ね」鵬翦はまるで、聖女の如く胸の前で両手を組んだ。「そして、それは人と人との関り合いすべてに言えることだとも思っている」

「欲しがるのではなく……与えるもの……？」

「そうよ。互いに与え合うことこそが愛であり、人と人の繋がり礎」鵬翦はもう一度瞳を閉じ、恋を歌うかのように語った。「私は祝融様やラフマーンの小父さま、ミンガⅡラマ師匠を尊敬しているわ。愛しているといってもいい」

そして、黒衣の魔女はその双眸を見開いた。

「デアウス、私はあの方々への敬意と愛情を欠いたことがあるかしら？」

「いや……」アル・イクシルは魔女の術中に嵌っているとわかってはいたが、事実は事実だ。

「君は少なくともその三名への敬意や愛情を欠いたことはない……」

「そうでしょうね。私もそのつもりよ。そして、それは祝融様が保護者として、ラフマーンの小父さまが養育者として、ミンガラム師匠が学問の先達として、皆、私に色々なものを与えてくれた事に――私を愛してくれたことに由来しているの。だから、私もあの方々に与えたいと思うわ。あの方々を愛したいの。残念ながら、その機会に恵まれていないけれどもね」

「僕は別に君のあの方々への愛を疑っているのではない。何故、その愛を他人に与えられないのかと聞いているんだ……！」

そのアル・イクシルの大声は氣勢で論理を誤魔化そうとしたものだったのだろう。当然、鵬翦がそんなものに揺らぐはずもない。

「私は常に与えているわよ。税金は滞りなく支払っているし、それに私が生み出せる最も価値あるもの、すなわち『英知』も。これ以上、何が望みなのか？」

「……………」

アル・イクシルに後の言葉は続かなかった。何しろ、鵬翦の言葉はあまりにも正しい。あの微分の発見一つでも、既に鵬翦は十分に社会への貢献を果たしたといってもいい。少なくとも、探究士ウツァマーの端くれたるアル・イクシルはそう考える。鵬翦の他人への奉仕が足りないというのならば、現行人類は一人残らず、非難に値する存在となってしまう。

「まさか、これに加えて、私からの個人的な敬意や愛情を差し出せというの？ 冗談じゃないわ。私の他者に対する貸借関係は明らかに貸し出し超過よ。先に述べた一部を除いてね。そして、その例外には私は十分な敬意や愛情を差し出している。それ以外に者達に敬意も愛情も差し出していないことは認めるけどね、それを無暗に欲しがるのは筋違いではないかしら？ 大体、敬意も愛情も自分が敬いたい相手や愛してみたい相手にこそ、向けるべきものですよ。要求されたからといって、差し出さねばならないものなの？」

「……………」

「私は敬いたい人を敬い、愛したい人を愛する。それがそんなにいけないことかしら？」

そう言い終えた鵬翦の前で、アル・イクシルは長い沈黙を続けた。そして、その静寂の果てに声を絞り出す。

「……さっきの他人への興味の話、あれは興味を抱くに値しない故に、興味を抱かないのだということか？ 認めて欲しければ、まずは力を示せということか？」

「そういうのはちよっとオトコノゴ的に思えるけどね」と、鵬翦は苦笑しつつも、アル・イクシルの言葉を肯定した。「しかし、意外と物分りがいいじゃない。まあ、この私ほどの乙女

と釣り合う者などなかなかないということよ。クッククック、その割に身の程知らずが多いけどね」

「だから、何故、そうやって、反感を招くようなことを言う！」

憤るアルⅡイクシルを鵬翦はいつものように嘲った。

「じゃあ、逆に聞くけれどさ——あなたは私にどうして欲しいの？」

「どうして……」

「どうして欲しいの？——この言い回しって、ちょっと卑怯よね」鵬翦は自分で自分の言葉を否定した。「私に褒めてもらいたい？私に謙ってもらいたい？いつも品行方正に振る舞い、皆に尊敬と愛情を惜しみなく分け与える——そんな私をあなたは見たいの？」

鵬翦はあまねく光を飲み込む岩戸の様な黒洞の双眸を幼馴染に向ける。

アルⅡイクシルは重い瞼の下に隠れた焼け土色の眼で幼馴染を見つめる。

先に視線を逸らしたのは——やはり、アルⅡイクシルの方だった。

「そうよ、仕方がないのよ」鵬翦は手持ち無沙汰になったのか、一張羅の黒髪を弄り始めた。「強者は強者であることそのものが、弱者にとって、その薄っぺらな自尊心を踏みこむ暴力であるのだから。あなたが今、私に憤っているようにね」

そして、本格的に髪を結び始めた鵬翦。横髪の一房を掴み、三つ編みを作りだす。

「……弱を以て強と為すこともあるだろう……」

ポツリと少年が呟いた。少女は髪を編みこむ手を止めた。

「……愚に依って賢となることもあるだろう……」

視線を逸らしながらであったが、少年は声を徐々に大きくする。

「卑しさから気高さが生まれることもあるだろう」

「面白い命題ね？」鵬翦は身を乗り出し、口付けを求めるかの如く、アルⅡイクシルに囁いた。「是非、実例を見せてくださいな。《白衣の賢者》」

「……っ！」

ウルルにおける階位は最低位の《白》から、《赤》、《橙》、《黄》、《緑》、《青》、《紫》の六階を経て、最高位の《黒》へと至る。

繰言になるが、鵬翦は既に最高位である《黒》である。対するアルⅡイクシルは未だ最低位である《白》であった。

このウルル黎明期において、階位と実力、年齢や才能などに生じる相関係数の目安ははっきりとはしていなかった。だが、後世から見れば、二十歳前にウルルに入ったものでも、三十代でようやく《赤》となり、《橙》として一生を終えるものも多い。なんだかんだとあって、アルⅡイクシルだけが別段劣っているわけでもない。十五で《黒》になった鵬翦が別格なのだ。

しかし、それでも《白》が最下位の探究士であることに違いはない。故に《白》の多くは

己の芽吹かない才能に焦燥するか、あるいは絶望している。正直、十代半ばのアルルクシルたちには、まだ余裕がある。だが、十年後にも同じ余裕があるとは思えない。何より《白》はあくまでも最下位、つまり、何の成果も上げていない探究士である。その名の通り、真つ白な経歴の賢者は他の探究士達に押捺されやすい。

そして、この階位の探究士——すなわち、最低の探究士であるアルルクシルに与えられる神御衣は柄のない白い、純白の外套。

神御衣自体が大変な高級品とはいえ、結晶構成が最も単純で最も安く手間のかからない、他の神御衣に比べれば、一段劣る品。だから、今現在、このアルルクシル・ディアウスの瘦身を包んでいる《純白の外套》は侮蔑の対象となりえる代物だった。

まして、魔女の《漆黒の法衣》とは比べることすら、愚かしい。

——故に僕は《白衣の賢者》というわけか……。

アルルクシル・ディアウスはくつくつと自嘲した。今度こそ、この魔女の森を立ち去るつもりであった。

「……用は済んだ。長居してすまなかった。もう帰る」

そして、《白衣の賢者》はその敬称の由来である《白衣》を翻した。

白衣の少年は立ち去った。

黒衣の少女はそのまま無言で、渡された封筒の中身を熟読する。

そこで、アブタフェンチェンが——今まで、同室していながら、微動だにせず、所有物に相応しい沈黙を貫いていた奴隷の少女が——意を決して口を開いた。

「あ、あのご主人様、妙齢の女性が男の前で……」

「ウマイヤ」

言葉を遮る主の一言に、奴隷の少女は神鳴りに怯える幼子のように眼を瞑って震えた。

「私はあなたの偶像ではないのよ。あなたは私のお人形さんだけけどね」

アブタフェンチェンの息遣いははつきりと荒くなっていた。

「心得違いはよくないわね。クス、それはそれで調教のしがいがあるけど……」

そして、奴隷の少女はビクツビクツと痙攣し、再びその場に崩れ落ちる。床に倒れ、とろんとした目を開く。しかし、鵬翦はそんなアブタフェンチェンを一瞥しただけで、その後は気にも留めなかった。

「だけど、アルルクマルだっけ？あの男、意外といい勘しているわね」

鵬翦はアルルクシルから受け取った封筒の中身——表題『帝国における死刑囚の生体利用に関する法的準備について』——に眼を通しながら、称賛した。

「い、卑しさが……」桜色に染めた頬を床に横たわらせ、奴隷の少女は搾り出すように昂っ

た声を上げた。「……卑しさが鋭さとなることもあるのでしょうか」

鵬翦はその物言いを面白がる。

「あら、ディアウスみたいなこと言うのね」

すると、恍惚に浸る彼女の中で、敬愛する主に声をかけられた幸福感と、嫌悪する男に喩えられた不快感が入り混じったらしい。なんともいえない複雑な顔が作り上げられた。

「……とはいえ」クツクツと魔女は一笑いして、頬を引き締める。「注目すべきなのはアル||カマルではなく、アル||イクシルでしょうね。白衣如きで足踏みする連中に、この私は止められないでしょうけど……。それでも、もし、あの連中の内から、私の前に立ち塞がるものがあるとしたら、ああいう身の程知らずに違いなわ」

*転・後編

年齢十七のムニール・アル||カマルは、一つ年下の親友であるアル||イクシル・ディアウス
の姿を見つけた。少し早足で彼の方に歩み寄る。アル||イクシルの方も、アル||カマルに気
付いたらしい。彼の方からも、こちらへ足を進める。アル||カマルは無事に親友の姿を探し
出せたことに安堵し、表情が和らぐ。一方のアル||イクシルの方は何やら渋い顔をしていた。
もともとアル||イクシルはあれで、内気で陰気で、人付き合いが下手で、その癖、甘えたが
り屋などところがある。今は、まだ、アル||カマルが何のためにここにいるのかはつきりし
ない。だから、アル||カマルがまた自分を待っていてくれたのではという期待と、それ
が単なる思い上がりではないかという不安が、彼の中で交錯しているのだ。それで、ああい
う風にまごついているのだ。そして、自分が奴の前で軽口の一つでも叩いて、前者の期待が
正しいことを証明してやれば、アル||イクシルは破顔一笑するのだ。まったく、手のかかる
奴だ。だが、それ故に可愛い奴だ。しかし……。

「……アル||カマル、僕を待っていてくれたのか？」

「ああ、なんだよ、今度は察しがいいじゃないか」

「……前回は好意ゆえ、今回は後悔ゆえか？」

珍しく鋭い目で見つめるアル||イクシルにアル||カマルは動じていた。無理にもあるまい。
あの《ガイス・アルシヤナーナ魔女の森》から、帰ってくる自分を、アル||カマルはわざわざ馬車駅で待って
てくれたのだ。そんなありがたい友人に対して、アル||イクシルは冷たく問いかけている。

「アル||カマル……例の人体実験の噂、どこで聞いた？」

「は？なんだよ、藪から棒に」

「やっぱり、あれか？』どこで聞いたかなんて、覚えていない』か？」

「ああ……そりゃ、そうだが……」

「『どこからも、聞いた覚えはない』の間違いではないんだな？」

「……何が言いたい？」アル||カマルの顔に翳りが指した。

「人体実験の噂……あれは君が他人から聞いた話ではなく、君が自分で考えた話じゃないの
か？」

「何を……」

「よく考えて、答えてくれよ、アル||カマル」相手が言葉を紡ぐ前に、アル||イクシルは言
い放った。「君が『否』^ラといえは、僕は今すぐ、君の周りの人間に聞き込みを始める。現実と
いう明確な基準がある以上、この手の嘘は容易く見破れるぞ」

しばらくの沈黙。そして、アルⅡカマルは嫌に大人びた動作で紙煙草を取り出した。

神御衣の一端を丸め、言霊を唱え、祝詞を紡ぎ、言語巫術《始まりの盗み火》を発現。神御衣の結晶含有有機物から気体炭化水素を合成。合成した炭化水素を神御衣の中で空気と混ぜ、酸素分子と炭化水素の接触条件を整えた後、観念巫術で静電気を起こし、着火。炭化水素が燃える空間に、素早く、煙草の一端を近づけて、火をつける。しかる後、煙草を口に含み、アルⅡカマルは紫煙を棚引かせる。

「……」アルⅡイクシルは一度話題と語調を和らげることにした。「……吸っていたのか？」
「別に隠していたわけじゃない。が、お前は嫌いだろ。だから、お前の前では避けていた」
たしかに、アルⅡイクシルは酒も煙草も嫌いだ。これは父親の教育が厳しかったというよりも、単に感性そのものが子供のままだからだろう。

「なあ、知っているか？あの魔女が十三歳の幼女を鎖に繋いで奴隷にしている話。それでな、毎夜毎夜、その娘を強姦しているんだとさ」

アルⅡカマルが唐突に切り出した話題に、アルⅡイクシルは再び昏い目を取り戻す。

「……それも、君が考えた話か？」

「いや、これはユースフから聞いた話。真実、人から聞いた噂話だ。もともと、以前、お前から奴隷の少女の話は聞いたから、一定の信憑性があるな」

「……何が言いたい？」なんでもない軽口を叩いているかのようなアルⅡカマルの口ぶりにアルⅡイクシルは苛立った。

「別にこの手の噂話に興じているのは俺だけじゃないってことさ」

「そんなこと、何の意味もなさないだろうがっ！」

「だろうな……」憤るアルⅡイクシルに対して、アルⅡカマルは落ち着きを崩さない。「嘘や陰口は、罪悪であり、自らを卑しめることに他ならない。そして、己の裡の卑しさが問題なのだから、他の在り様との関係はない。もし、その関係を認めれば、俺は自我なき奴隷となってしまう。そして、お前の親父さんの嵌っている宗教風によれば、この宇宙の初期条件決定者から唯一《自由》を与えられた存在である人間は、断じて奴隷ではありえない……そんなところか？」

アルⅡイクシルは返す言葉がなかった。まさしく、その通りだ。思索を深めれば、得られる普遍的な一つの真理であり、論理である。しかし、それは同時に思索を深めなければ、辿り着けない真理であり、論理であるのだ。アルⅡイクシルは日頃から、父に諭され、また、自ら心がけているからこそ、すぐにアルⅡカマルの言葉の正しさを認めた。しかし、そういった経験のない第三者がこの場にいれば、その言葉のいくつかに疑問符を浮かべただろう。逆に言えば、アルⅡカマルはこのことについて、思索を深めたことがあるということであり、また、そういった話し方をする以上、アルⅡイクシルにも同じ経験があることぐらい、承知の上ということになる。

……だったら、何故——とアルⅡイクシルの中を憤怒と疑念が駆け巡った。

「人を見る目のないやつにはわからないし、自覚もないだろうが、お前という男は異常なまでに謹厳で潔癖だよ。そして、残酷で傲慢だ」

「だから、何が言いたいんだ？」

「お前、俺に失望したろ。俺との友誼を後悔したろ。表には出さないし、これまた自覚も無いだろうが、今、お前の中で、俺という人間の品位は確実に下方修正された」

アルⅡイクシルは「それが嫌ならっ……」と口を開きかける。が、アルⅡカマルは間断なく、続ける。しかも、それは糾弾の色を帯びていた。

「これから先、お前は俺との付き合いをどれだけ続けようとも、今日のこの日を忘れない。

どれだけ、顔で笑っていても、腹の底じゃ、俺を信用しない。アルⅡカマルという人間の価値を見下げるようになる。嘲い、見下す……あの黒衣アルⅡシャイター・カパー・アズワドの魔女アルⅡシャイター・カパー・アズワドのようにな」

脳裏に浮かぶ黒衣アルⅡシャイター・カパー・アズワドの魔女アルⅡシャイター・カパー・アズワドの残酷な笑み。アルⅡイクシルは開きかけた口を閉じた。

「練言になるが、自覚が欠けているくせにお前は残酷で傲慢だよ。なるほど、たしかにお前はあの魔女アルⅡシャイターの幼馴染だ。同じ環境で姉弟の如く育ってきただけのことはある。あの妖婦にそっくりだ」

不寛容。アルⅡイクシルは俯いた。今まで自分からは遠いと思っていた単語が急に身近なものに思えてくる。反論を促すようにアルⅡカマルはしばらく、その煙草を味わうのみだったが、アルⅡイクシルに言葉はなかった。

「……わかっているさ、そんなことは。わかっているんだよ、そんなことは」

しばらくしてから、アルⅡカマルは自嘲気味に呟いた。そこに糾弾の色はなく、むしろ、懺悔の翳りがあった。

「俺だってな。ここに来る前の私塾では首席や次席だったよ。ここに来るまでは、天才と呼ばれ、神童と呼ばれていた」

アルⅡイクシルは押し黙ったままだった。『僕だって、そうだった』とは言えなかった。

「その上、実は手足もよく動いてくれてな。故郷の村じゃあ、殴り合いでも負けたことはない。しかもな、この美形だぜ」アルⅡカマルは珍しく己の容貌を誇った。「もう、むっちゃくちゃ、天狗になってたよ。で、当然の如く、周囲からは反発を食らうわけだ。でも、不思議だったぜ。……どうして、陰口を叩く連中は自らを磨こうとしないのかなって？」

自分とて、何の努力も研鑽もなく、優秀であったわけではない——そんなことをアルⅡカマルは語りだした。

たしかにアルⅡカマルは初めから、人よりも一歩進んでいたところがあった。しかし、その差を二歩三步と離していったのはアルⅡカマルの努力ゆえだ。人よりも三歩遅れていたところを、その差を二歩三步と縮め、ついには追い抜いたのはアルⅡカマルの研鑽ゆえだ。ある意味で、当時のアルⅡカマルは純粹であった。人より優れていれば、褒められる。褒めら

れるのは嬉しいから、もつと頑張る。人より劣っているのは、悔しい。悔しいのは嫌だから、もつと頑張る。その繰り返しで、アルⅡカマルはあらゆることで天才と呼ばれるようになり、また、自らを神童だと思ふようにもなった。当時のアルⅡカマルはその小さな世界に君臨する強者だった。同時に弱者を軽視し、軽蔑していた。そして、知性においても腕力においても、弱者に暴力を振るうことに躊躇いはなかった。アルⅡカマルは人間を自由なる生き物だと考えていたからだ。『自由』すなわち『自らに由_よって』いる存在だ。つまり、人間は己の在り様を『自らに由_よって』決定できる。一般的な説明をすれば、強者は強者であるという己を『自らに由_よって』決定していき、弱者は弱者であるという己を『自らに由_よって』決定していき、ということだ。具体的な説明をすれば、九九を諳んじれる奴は、九九を諳んじれるようになるために頑張っているということであり、九九を諳んじれない奴は、九九を諳んじれるようになるために頑張っていないということだ。これはすべてに言えることで、因数分解ができない奴は、できるようになるための努力をしていないか、あるいは怠っているのだ。初めから自分にはできるわけがないと研鑽をしないか、途中で投げ出しているのだ。つまりは諦めるといふ選択肢を取ることで、『因数分解ができない己』を『自らに由_よって』決定しているのだ。そう、周囲の馬鹿どものように。逆にできるやつは逆の選択を選び、逆の己を獲得する、そう、この俺のように。繰言になるが、人間は自由な存在だ。無限の可能性を秘め、その中から、努力や研鑽という過程を経て、己の望む姿になる力を具えている。ならば、弱者は弱者らしく、地べたに這い蹲_すつていればいい。連中は自分がそれを願ったんだから、本望だろう。強者は強者らしく、その背中を踏み付けて上に立つ。俺は自分でそれを願ったんだから、本望だ。趣旨一貫した素晴らしい論理だと考え、その論理に従って、アルⅡカマルは日々を送っていた。ところが、周囲の連中はこの自分にけちをつけること甚だしかった。一生懸命頑張って、手に入れたアルⅡカマルの知識や腕力をまるで不当なものであるかのように、妬んできやがった。一人で妬んでうじうじしているだけならまだしも、ある時など、徒党を組んでアルⅡカマルの行動を非難し、改善せよと要求してきた。馬鹿だなあと思つて、わざわざ、先程の自由についての一般的な方の説明をしてやったら、連中は『訳_{ワケ}のわからんことを言うな!』とか喚_わいてきやがった。せつかく自分が見つけた素晴らしい論理_{ロジック}を凡愚にもわかるように懇々と説いてやったのに、とアルⅡカマルは不機嫌になった。徒党を組んでいる連中に知性を以って臨むのは無意味だと断じ、その場にいた全員に腕力を以って臨む羽目になった。数に差があったから、結構苦勞をしたが、最後はアルⅡカマルの周りに徒党を組んでいた連中の倒れた姿だけが残っていた。そして

——下らない。

とアルⅡカマルはそんな連中を唾棄していた。

「純粹さは残酷さに通ずる。そんな簡単なことも知らなかったよ。ここに来て、踏み付けられる側に回るまではな」

「……別に僕らは踏み付けられてはいないぞ」

「違うな。強者は弱者を踏み付ける。人間の能力が比較によって決定されるから、強者がいるおかげで、弱者は職を奪われるとかいう問題だけではないんだ。親父さんのおかげで、食い扶持の心配をしなくてもいいお前だって、強者の存在を妬んだことがあるはずだ。要するに強者はその存在そのものによって弱者を踏み付けているんだよ」

鵬鷲と同じようなことを言う——とアルⅡイクシルは思った。

「上手くまとまらなかったかな。だが、言いたいことは伝わったと思う」そして、ちよつきつい言い方になって、悪かったとアルⅡカマルは付け加えた上で、「弁解しておくが、別に俺はお前の幼馴染を取り立てて憎んでいるわけではない。彼女の方だって、別に俺へ悪意を持っていてるわけでもない……というか関心すらないだろうな。多分、名前も覚えてもらってはいない」

それは違うと口を挟みかけたが、アルⅡイクシルは何故か言い淀んだ。一方のアルⅡカマルも「それとな、なんていうか、つまり……」と繋げるべき言葉に詰まっていた。先程までは流れるかの如き口振りだったので、随分とギクシャクした感じがする。しかし、しばらくして、ようやく言葉が纏まったのか、いつもの調子で語りだす。

「つまりだな。たしかに俺が彼女のことを陰で誇るのとはよくないと思う。だが、それは本気ではないんだよ。先程のユースフにしても同じ事だ。その場の雰囲気というか、空気というのかな。ああ、共通の話題と言うべきか？ そういったものに乗じて、今回の様にあの魔女を誹謗中傷しているだけだ。共通の話題に過ぎないんだよ。感情を共有し、友情を深める手段だ。そして、その槍玉には上げるのはああいう魔女が適当なんだ」

アルⅡカマルは今なら、徒党を組んで自分にけちを付けに来た連中の気持ちが変わると言った。彼らにしたところで、それ程、アルⅡカマルが憎かったわけではないのだ。ただ、彼らが友人として結束する上で、共通の敵が必要であり、その役には当時のアルⅡカマルが適当だったのだ。何故なら、強者だったアルⅡカマルは存在そのものが、弱者であった彼らへの暴力であったのだから。勿論、群れを成して、たった一人に詰め寄るといえるのは、好ましくないだろう。だが、それは彼らが子供だったから、未熟な行いに出ただけだ。年輪を重ねれば、そんな蛮行は自制できるようになる。今のアルⅡカマルやユースフのように、本人のいないところ、身内の中だけで、自分たちを踏み付ける強者を誇り、負け犬同士傷を舐めあうという形に落ち着いていく……。

「しかし……やはり、それは君の卑しさに他ならないではないか！」

「まあな、俺は卑しいさ。で、どうすればいいんだ？」

アルⅡカマルは軽い口調で平然と言り返した。懊悩や躊躇など微塵もないその態度にアルⅡイクシルは言葉に詰まった。たしかにどうすればいい？ 僕はどうすればいい？

「陰口を叩いて何が悪い？ 鵬鷲子はまさにこのウルルに相応しい鴻鵠。俺は所詮、ウルルに

分不相応に転がり込んだ田舎者の燕雀。で、どうせ、俺らみたいな井の中の蛙の言葉なんて彼女のような人間にはどうせ右から左だ」

その通りだ。鵬翦は自分の言葉に耳を傾けなどしなかった。むしろ、それを弱者の言葉と嘲い、そして、嘲うことこそが強者の特権であり、愉悦だと考えている節があった。

「それで俺らが傷を癒せばいいじゃないか？誰も不幸になんてなっていないさ。それとも何か、あの魔女は俺達の戯言に一々心を惑わされるとでもいうのか？深く傷ついて、夜な夜な涙を流すとも言うのか？」

「……それは、絶対ないな」

幼馴染のそんな姿は想像すらできない。

「それと、あの魔女と縁を切るのがお前のためだというのは紛れもない事実だ」

改めて、真剣な態度をとるアルⅡカマル。気が付くと、彼の手の煙草は当の昔に燃え尽きていた。しかも、その指先には火傷の跡すらあり、アルⅡイクシルは動揺した。アルⅡカマルの指に火が触れたのはいつのことだろう？そして、彼はその熱さに気をとられぬ程、一途にアルⅡイクシルに向き合っていたというのか？

「弁解させてもらおうと、人体実験の話でっち上げたのは……いや、あれも完全にでっちあげ……とにかく、あれはお前のことを思つての話だよ」

勿論、彼女の人間性に問題があることは承知している。そんな彼女との交際が自分にとつても悪い結果を齎しかねないことも理解している。嘘から始まった君の言葉も、その辺りについては真実だった。アルⅡイクシルが火傷の事を頭の中から消して、そう答えるとアルⅡカマルは「それだけじゃない」と前置きして再び語りだした。

「黒衣の魔女は真の強者だ。故に俺達弱者からの誹謗中傷は彼女にしてみればむしろ勲章だろう。だが、お前は違う。お前は弱者だ。彼女とは違う。それは探究士としての力量以前の問題だ。今だって、そうだろう？俺のような弱者の戯言ざれごとにわざわざ耳を傾け、その負け犬の戯言たわごとに一々心を揺さぶられている。お前は能力以前に精神が鋭敏すぎる。お前は一面においては鈍感だが、しかし、そのもう一面においては過度な程に鋭敏だ。俺から見れば、それはお前の繊細さだ。俺はお前のそんなところが、可愛くもあり、肯定もしてやりたい。が、あの魔女はお前の鋭敏さに俺とは違った見解を示すだろう」

「……脆弱さと断じ、嘲うだろうな」

「そうだ。彼女はお前を傷つける。いずれにせよ、な。俺はお前の傷つく姿を見たくはない。だから、お前には彼女と縁を切つて欲しい。……これは俺のわがままか？」

アルⅡイクシルは首を横に振った。友情に溢れた、本当に自分にはもつたない位のありがたい忠告だ。でも……。

「それでも、僕は……君のようにはなりたくない。僕は……」

明らかに決別を意識した一言だったが、アルⅡカマルは揺らぐことがなかった。

「お前は夢を見ているようだがな」と辛辣ではあったが、優しい声で、言葉を紡ぐ。「夢を掴むのは偶然や運ではない、必然であり才だ。……野心を抱くことができるのは力ある者のみなんだよ」

「……夢とは弱者の希望ではないのか？」

「違うな。夢とは強者の特権だよ」

「その理こそ、黒衣の魔女と同じだろう」
アル||シャイターナア・カパー・アズワド

少年が幼馴染の少女のことを黒衣の魔女と呼んだのはこれが初めてだった。

「ああ、そうだな。そして、同時に世界の真理でもある」

「違う。断じて、違う。それは超克すべき迷妄だ」

ロゴス 論理も真理も先験的な存在であるはずだ。すなわち、過程や前提、条件を必要とせず^{イデア}に成立するものであるはずだ。鵬翦とアル||カマルが違う人間でありながら、同じ結論に至ったということは、それは思考主体たる人格という条件を必要とせず^{ロゴス}に成立するという事であり、それは先験的な存在であり、論理であり真理である。そう心の裡で囁く己の一部を消し去るため、アル||イクシルはいささか声を荒げていた。

「アル||イクシル……俺たちみたいな連中は無理せず賢く生きていくのが一番なんだよ。……ああいう連中にはなれない」

アル||カマルは穏やかな眼差しだった。少女であれば、たちまち、魅了されていただろう。だが、しかし……。

「……そうか、これはもしや扇動かい？」

「何……？」

アル||イクシルが歪んだ笑みを作り、アル||カマルは初めて動揺した。
「そうやって、卑屈になることで満足するように薦めれば、僕のように実力もないくせに自尊心だけが無闇に高い馬鹿は、逆切れして無駄な足掻きをしたくなる。結果、君は僕の行動を誘導することができる」

アル||イクシルは昏い目を取り戻した。自分の中にまるで不可思議な転轍機があつて、それが切り替わったようだ。そう、まるで、あの幼馴染に相對した時のように……。

「……いや、もし偽りない本心からの言葉なら、気にしないでくれ。こうやって、すぐ人を疑ってかかるのは僕の悪い癖だ」低くどこか粘り気に富んだ声でアル||イクシルは断じる。

「だが、もし、扇動のつもりなのなら……いいだろう。乗ってやるさ」

そんな友人を怪訝そうにしぼらく見めていたアル||カマルであつたが、その後、呆れたように深々とため息をつく。「……お前のその空想癖。想像力に繋がり、建設性にも繋がっていることは認めよう。だが、少しはちゃんと現実を見るよ」

「君は望んで現実の奴隷になりたがつているようだがね」アル||イクシルは苦々しく言い放った。「僕は自分の思うようにならない現実には屈したくはない。そして、空想こそがそれを

打ち破りうる鍵ではないのか？」

そうだ。現実とは逃避するべきものではない。現実とは超越すべきものなのだ。

「……お前、ここに来る前の俺にちよつと似ているよ」。

どこか遠いところにいる誰かを偲ぶように語るアルⅡカマル。その言葉は本心からのものなだろう。だが、アルⅡイクシルにはそれがくだらない言葉にしか思えなかった。そうやって、己の上位性を確保したつもりかと、アルⅡイクシルは心中でせせら笑ってすらいた。

「では、君はここに来る前もここに来た今も哀れな男だね」

アルⅡイクシルは白衣を翻す。その《純白の外套》アルⅡムラート、ニアフヤドは勢いよく風にたなびく。そして、その白衣がたなびく様は背に白い翼が生えたかのようであり、その姿は天使にも悪魔にも思える。マラーイカ イブリス

友は背中から暖かい声をかけた。

「なあ、俺はお前のこと……本当に好きだったんだぜ」

「僕もだ。残念だよ。ムニール」

「……さよならだな、ディアウス。その昏い目付き、あの女にそっくりだよ」

あの女というのは鵬翦のことだろう。ならば、自分は褒められたのだ。かけがえのない親友と別れた瞬間でありながら、アルⅡイクシルの心は躍動していた。

「で、俺の微分の研究資料が欲しいと？」

「はい」ナム

ミンガⅡラマの前で、アルⅡイクシルは堂々と肯いた。いきなり、師匠の私室に押しかけてきて、一方的な要求を突きつける弟子。考えようによっては、この上なく、不敬であり、不遜な態度をアルⅡイクシルは取っている。だが、ミンガⅡラマにはそれが小気味よいものとして映ったようだ。面白そうにニヤニヤと笑っている。ただし、その内容に怪訝なものは抱いているらしい。

「あのな、どうして、俺の微分が発表されなかったか、知っているか？」

「不完全であつたからです。鵬翦のものよりもはるかに」

「……面倒臭がっただけだ」その声には、わずかに屈辱があつた。

「ですが、あの微分は使い勝手が悪すぎます。鵬翦のものには遠く及びません」

「吼えるじゃねえか……」屈辱に怒気が混じる。

きっぱりと言い切るアルⅡイクシルに不満を露わにするミンガⅡラマであつた。が、それは世評の大勢でもある。繰言になるが、鵬翦は十五の時に微分を発見している。しかし、実はミンガⅡラマもまた、彼女とは別の方向から、微分の存在に気付いていたとされる。断片的に公表されている幾つかの資料を見ると、鵬翦にとっての微分が初めから純数学的であつ

たのに対し、ミンガ||ラマにとっての微分は物理現象——特に彼の発見した運動の三法則や万有引力の法則——の数学的理解の手段として、構築されている。ミンガ||ラマが鵬翦とはまったく独立したところで微分を発見したのは間違いないだろう。いや、それどころか、純粹に微分を発見した時期そのものは鵬翦よりもミンガ||ラマの方が先であるとすらされている。

では、何故、微分の発見者はミンガ||ラマではなく、鵬翦となっているのか？

その理由の一つは微分の発見をミンガ||ラマが論文にまとめなかったことだ。これは微分に限らない彼の悪癖で、ミンガ||ラマは論文執筆を面倒臭がる場所がある（アル||イクシルは丞相祝融の「真実を自分だけが知っていればよいものだ」とあの男は考えている」という言葉が一番もつともらしいと踏んでいる）。運動の三法則や万有引力の法則の発見の際も、その価値に気付いた丞相祝融の助言というか、要請というか、命令というか、脅迫がなければ、その総体がかの名著《自然哲学における数学的諸原理》にまとめられることはなかっただろう。そして、微分の際にはその内容を記した覚書が、ミンガ||ラマの机の引き出しのずっと奥の方にあり、祝融もその存在に気付くことはなかった。そのため、ミンガ||ラマがその存在を公表しないままに歳月は流れた。そして、遅筆であっても、まめに論文執筆に励んでいた鵬翦に微分発見一番乗りの座を与えてしまったというわけである。

しかし、理由のもう一つは鵬翦の微分とミンガ||ラマの微分の差異だろう。微分という概念に鵬翦が純数学的に接近していたのに対して、ミンガ||ラマは応用数学からの逆算で接近していった……と記したが、二つの微分の差異はその部分だけではない。ミンガ||ラマの微分は鵬翦のそれと比べて、はるかに難解であったのだ。難解さというのは、複雑さであり、つまりは洗練されていないということである。もつと簡単に言えば、同じ微分でもミンガ||ラマのやり方は鵬翦のやり方と比べて、とても使いにくいのである。これが微分の発見者として、ミンガ||ラマよりも鵬翦が挙げられる最大の理由だろう。

「しかし、鵬翦の提案した無限小の概念よりも、あなたの提案した変化率の概念の方が現行微分の問題点をより明確に出来るのです」

「……続ける」冷たい声で、ミンガ||ラマは答えた。

「もし、 u と v とが x の関数ならば、 x に関する積 uv の変化率は、 x に関する u の変化率と v の変化率によって、どのように表されるでしょうか？」

「……要するに、 $\frac{d(uv)}{dx}$ は $\frac{du}{dx}$ と $\frac{dv}{dx}$ とでどのように表されるかという問題だな。そりゃあ、

$\frac{du}{dx}$ と $\frac{dv}{dx}$ の積……」

「では、ありません。 $\frac{d(uv)}{dx}$ は $u \frac{dv}{dx}$ と $v \frac{du}{dx}$ の積に等しい。これが正答です。実際に、簡単な自

然数をいくつか代入してみてください」

「言われるままに机に向かい紙の上でさらさらと計算するミンガッラマ。しばらくして、「ほう」と感心の声を上げた。それから、何度も計算を繰り返してから、アルイクシルを睨む。そして、満足げに笑い、「なるほど、よくまあ、気付いたものだ……」と賞賛した。

アルイクシルは毅然とした態度を崩してはいなかったが、実のところ、冷や汗をかいていた。ミンガッラマは、へらへらと阿諛追従する者よりは、毅然と牙を剥く者を好む。だから、問題ないとは踏んでいた。しかし、それでもやはりアルイクシルの言動はかなり危ない。師匠に対する弟子の態度を逸脱している。発想への賞賛の前に、態度への叱責が飛んできてもおかしくはなかった。

ただ、一方でこの着眼点そのものには自信があったのも事実である。

今、ミンガッラマは $\frac{d(uv)}{dx}$ は $\frac{du}{dx}$ と $\frac{dv}{dx}$ の積に等しいと考えた。勿論、これは明らかな誤りだ。後世であれば、高等教育機関卒業程度の知識があれば誰もが、 $\frac{d(uv)}{dx}$ は $\frac{du}{dx}$ と $\frac{dv}{dx}$ の積に等しいとするだろうし、また、それが正しい。しかし、これについて、ミンガッラマを責めるのは酷というものであろう。当時、この誤謬を正すものはいなかった。つまり、当時の数学者、というか自然哲学者は大概 $\frac{d(uv)}{dx}$ を $\frac{du}{dx}$ と $\frac{dv}{dx}$ の積であると考えており、それが世の主流であった。しかし、それが誤りであることをアルイクシルは今指摘した。

つまり、アルイクシルは現行微分の問題点、すなわち、『厳密性の欠如』にいち早く気付いたのだ。勿論、それ自体は以前から言われていた。実は物理現象において、微分を用いた計算結果と観測結果が一致しないことは度々あったのだ。しかし、その問題の根をここまで具体的かつ明確に示した例は少ない。なるほど、たしかに $\frac{d(uv)}{dx}$ は $\frac{du}{dx}$ と $\frac{dv}{dx}$ の積ではなく、

$$u \frac{du}{dx} \text{ と } v \frac{dv}{dx} \text{ の和である。そして、} \frac{dv}{dx} \times \frac{du}{dx} \text{ と } u \frac{dv}{dx} \text{ と } v \frac{du}{dx} \text{ では計算結果はまるで違ってくる。これでは現$$

行微分に厳密性が欠けているのも無理はあるまい。

「しかし、ここまで挿んでおきながら、最後の一線で、俺に頼るとはな……。もったいなくもあり、みつともなくもある話だ」

ミンガッラマはアルイクシルの功績を認めた上でそう愚弄した。

わざわざアルイクシルがミンガッラマの許に押しかけて来たのは、少年が $\frac{d(uv)}{dx}$ は $\frac{du}{dx}$ と

^出_入の積に等しいと気付いたものの、その先の発展に行き詰まった証拠である。だから、解決の糸口を探しに師匠の助けを借りに来たのだ。勿論、それは前述の如く、単純に資料提供を求めるといふ意味もある。だが、わざわざ、アルⅡイクシルが今まで気付いてはいたが、自らの中で温めるのみだった着想——言ってみれば、探究士としての己の手の内をさらした意味は別にもある。つまり、アルⅡイクシルはミンガⅡラマという最高の参考資料に助言を求めにきたのだ。ミンガⅡラマは数学的才覚、力量、実績すべてにおいて、あの鵬翦すらも上回る。間違いなく、よき助言者となりうる。いや、むしろ、最高の助言者だ。彼に聞いて駄目ならば、もはや誰に聞いても駄目だと、誇張抜きで断定できる。しかし、ここでミンガⅡラマに有益な助言を貰えば貰うほど、この先、アルⅡイクシルがこの研究で成果をあげた時の功績は彼のところに方に流れてしまう。いや、彼我の圧倒的な権威の差、そして何より実力の差を鑑みれば、研究そのものを乗っ取られる事も考えられる。勿論、それは、それでもここで足踏みしているのはまじだろうという判断の上の行動である。だが、それはやはりもったいない話だ。

また、探究士としてのあり方の問題もある。自分の研究が行き詰ったからといって、他人の手を借りるのはみっともないとアルⅡイクシルも思う。たしかにアルⅡイクシルはミンガⅡラマと師弟関係にある。だが、それ以前に同じ探究士であり、真理への渴望を競う敵手なのだ。たとえ、アルⅡイクシルが一介の白^{アルⅡアリムア・サラト・アブヤ}衣の賢者に過ぎず、対するミンガⅡラマがウルルの長にして、帝国学会第一先導者であっても、それは変わらない。そして、敵の手を借りることに屈辱を感じるのが生粋の探究士気質というものであった。いや、宿業といえるかもしれない。真理の探究は畢竟、個人作業だ。宇宙の真理をいくら人に聞いてもまわっても、それを自分が理解できなければ意味がない。結局、探究士は世界に相對する時、孤独であり、孤高なのだ。思索に耽るのも、論文を書くのも、一人でやらねばならないということである。自分以外はすべて敵。そのくらいの気概がなければ、真の探究士としてやっていくことはできない。……勿論、これには異見も多い。だが、少なくとも、ミンガⅡラマは孤独と孤高を望む男だし、鵬翦も同じ類の女だ。そして、どうやら、アルⅡイクシルもその類の男のようだった。だからこそ、アルⅡカマルを拒み、ここにいる。それだけにみっともないというミンガⅡラマの言葉にも共感していた。

いずれにせよ、あの^{アルⅡシャイターナ・カバ・アスワド}黒衣の魔女^{鵬翦}ならば、絶対にここで師匠であるミンガⅡラマの手を借りようとは思わないだろう。もったいないし、みっともないからだ。ただひたすらに努力し、研鑽し、己の力のみで、事を成すだろう。アルⅡイクシルはそんな彼女を美しいと思う。そう、今なら、そんな幼馴染を素直に美しいということができる。だが、しかし、それでも、なお……。

「僕は凡夫です。僕は愚者です。故にこそ、醜く足掻くのです。ただ、そこにあるだけで、

何かを掴むのは天賦の才に恵まれた賢者たちにまかせておけばいい」

ミンガ||ラマの皮肉に迷い無き言を返すアル||イクシル。ミンガ||ラマは「その屹然さや、よし」とした。だが……。

「悪いが、その手の資料はもう残っていない。ちょっと前までは引き出しの奥に詰め込んでいたんだが、今年の冬寒かったろ？薪に困ってな。まとめて、燃やしまった」

その時、弟子がどんな顔をしたのかよくわからない。少なくとも、筆舌に尽くしがたい表情をしていたのだと思う。その容子に師匠はガハハハツツと豪快に笑う。そして、机の横から、棒状の何かを取り出し、「代わりにこれでも持っていけ」と放り投げた。

お世辞にも体術に優れるとは言いがたいアル||イクシルは突然の事態に対応し切れなかった。その棒状の何か——それはアル||イクシルの身丈を越える長さの杖だった——を掴もうと、二度、三度、空中で、触れはしたのだが、結局、床に落としてしまう。アル||イクシルはカランカランと音を立てたその長い杖を拾い上げ、そして、意外なその軽さにいささか驚いた。

「それを見せれば」と、弟子が手に取ったのを見て、師匠は説明する。「アル||ムラート、アブヤド白 衣」の前でもこの帝国のすべての図書館に入れる」

なんでも、この杖を持つものにはミンガ||ラマが与えられる限りの権限を与えるようにと、いくつかの帝国諸機関に到達してあるらしい。

「ウルル中央図書館の第三種閲覧制限文章の中から、ナジュマツト・スブフの論文を漁れ。彼女が提唱した概念にあの魔女が提唱した『無限小』の概念に近い代物についての記述があるはずだ」

「ナジュマツト・スブフ……そういうえば、『収束』なる概念の提唱者でしたね」そこで、アル||イクシルは脳裏に閃くものがあった。「いや、あれ、まてよ……これはひよつとすると……」

「そうだ。『収束』なる概念の数学的厳密性は、あの女の『無限小』よりも上だろう」
「あ、あああ！」

アル||イクシルの中で思索が爆ぜるように広がっていく。そして、少年の思惟が真理と繋がった。奪うようにして、ミンガ||ラマから紙と筆を借りる。

ここで、
 $f(x) = x^2$ という関数の導関数を求めてみよう。当然、その過程は……。

$$f(x) = x^2$$

とした時

$$f'(x) = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x+h) - f(x)}{h}$$

$$f'(x) = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{(x+h)^2 - x^2}{h}$$

$$f'(x) = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{x^2 + 2xh + h^2 - x^2}{h}$$

$$f'(x) = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{2xh + h^2}{h}$$

$$f'(x) = \lim_{h \rightarrow 0} (2x + h)$$

$$f'(x) = 2x$$

……となる。しかし、ここで注目すべきは4行目から5行目へ行くときhで割っていることだ。にもかかわらず、5行目から6行目へ行くとき、hに0を代入している。つまり、これでは『0で割っている』ことになってしまふのだ。当然、その過程に対し『0で割るなど認められるのか?』という批判も根強い。これに対して『このhは0に限りなく近い数であつて0ではない。故に0で割っているわけではない』という反論が現在はまだ通つていないが……。

「そうだ……。いけるっ! いけるぞっ!」

思わずアル||イクシルは拳を握つて、叫んでいた。あとはこの挽ぎ取つた真実の果実を誰にでも食べられる形に調理するだけだ。体系化し、言語化し、論文にまとめるだけだ。

「じゃあ、とりあえずはナジュマツト・スブフの論文を漁つてきますっ」

一礼し、図書館に向かつて走り出すアル||イクシル。だが、少年はその一歩目から、いきなり派手にすつ転んだ。身体の平衡が崩れたかと思えば、顔から、床に急落下。鼻の骨が折れたのではないかと激痛。実際、鼻血が出てきた。しかし、学術的興奮の最中にあるアル||イクシルにしてみれば、それは下らぬ些事に過ぎない。汚らしいが、適当に服の裾で血を拭う。そして、再び、駆け出そうとする。……が、何故か、身体は前に進まない。

「ちよつと、待て。落ち着け」

振り替えると、ミンガ||ラマは呆れ顔で、突っ立っていた。よく見ると、アル||イクシルが羽織っている純白の外套の端っこを踏んづけている。ああ、なるほど、それで自分はいきなり転んだのか、と納得した。アル||イクシルは鵬翦とは違い、何もなかったところから転ぶほどには運動音痴ではないのだ……。

「つて、何するんですか、師匠!」

アルイクシルは思い返したように抗議する。一本のミンガラマはやんちゃ息子を嗜めるように溜め息をついた。

「おいおい、ここまで、お膳立てしてやったんだ。ただで返すわけにはいかんぞ」

「あ、ああ、そうですね」

アルイクシルは急に心が冷めていくのを感じた。とりあえず、ちり紙で鼻血を抑える。ついでに言語巫術で、傷ついた血管表面に適当な凝固剤を合成して、出血を止める。たしかにミンガラマの言葉に誤りはない。ここまで、素晴らしい助言をもらったのだ(というか、このまま、ミンガラマが論文執筆に走ってもおかしくはない)。代償は大きなものになるだろう。しかし、こういう時の代償というのが、どういうものになるのかアルイクシルにはわからなかった。若いから、経験が少ない。何より、親の金ならともかく、自身の才覚に利用価値を見出されたことなど皆無だ。

自分ほとんどないものの尻尾を踏んでしまったのではないか——そんな不安が若く初心な少年の中に生まれるのを見計らったように、世界最高の探士は「その杖だが……」と口を開いた。

「ええ……東方で言う藜あかぎというやつですよ。これ」

長さ四クーデ(約二メートル)程の杖の正体をアルイクシルは推測した。藜ヒンドは中西あるいは夏シヤで、平地の人家近くに生えるアカザ科の一年草だ。茎は直立し、長い柄があって、互生する。葉は菱状卵型や三角状卵型で、若葉は食用にもなる。この場合、着目すべきは直立する茎だ。その真っ直ぐに伸びる茎は丈夫で、かつその太さも握るのに適当なので、乾燥させて杖に用いることがある。多分、この杖もそうやって、作った藜の杖なのだろう。形状から、アルイクシルはそう判断した。しかし、その長さ、そして、質感がちょっと気になる。たしか、藜は通常三クーデ(約一・五メートル)程までしか成長しない筈だ。だが、これはなんと四クーデ(約二メートル)ほどの長さにも達している。もともと、そのくらいは個体差の範疇なのだろうとアルイクシルは断じた。あるいは近親種なのかもしれない。ただ、質感はやはり——と、しげしげと眺め、触っていると、ミンガラマが正解を与えてくれた。

「いや、精霊結晶製だ。もともと、今、流行の結晶細胞製ではないがな」

なるほど、藜の生命活動を精霊にエミュレートさせているアカザ型精霊結晶細胞で構成されているわけではなく、単にその外観を藜に模させただけの精霊結晶の塊だということか……。たしかにこの質感は精霊結晶っぽいところがあるように思えなくもない。

「ん？」ふと、アルイクシルは気が付く。

——反応しない……何故だ？

しかし、その独特の手触りはたしかに精霊結晶そのものだ。

——情報連結を拒否された？馬鹿な……では、この精霊結晶は総体精霊の禁則を無効化する上位権能を有しているというのか……。たしかに、それなら、ネットワークによる精霊の

相互補完的融合修正を撥ね付けられるが……。いやまてよ、ネットワークからの独立性を維持するために、あえて……。

「代償は研究課題だ」

ミンガ||ラマの言葉は思索に耽り始めたアル||イクシルの意識を絶った。

「その正体を探れ。最初は黒衣アル||イヤターナー・カバ||アスワドの魔女に頼もうかと思っていたんだがな。あいつは忙しそうだね」

「……僕にも自分の研究があります。そのためにあなたに頼みに来たのですよ」

「……察せよ。実は俺はちよつぱり、あの女に嫉妬していて、これ以上、成果をあげられると俺の立場がない」

その時、アル||イクシルはあの磊落な師匠が何を言ったのかすぐには理解できなかった。

眼前の黒肌金髪を具えた異形の賢者は、あのミンガ||ラマなのに。《ウルルの長》シャイ||アル||ウルルにして、帝国学会第一先導者、運動の三法則や万有引力の法則を発見し、《自然哲学における数学的諸原理》を記した世界最高の探究士ミンガ||ラマだというのに。齢も未だ三十ほど。まだまだ、これから。人類に数々の福音をもたらす存在であるというのに。いや、今すぐ、探究士を引退し、死ぬまで、年金を食むだけの存在になっても、これまでの業績のみで、その尊崇は揺るがず、死後も人生の勝者として、歴史に名を残すことが定まっている男だというのに……。

人生とは己の弱さと向き合い続けることなのだろうか？

だとしたら、彼女もまた、己の弱さと向き合うことがあるのだろうか？

「現実問題として、俺が十年がかりで手も足も出なかったからな。これが理解できるようにするために、探究士一人一人の知性ではなく、その基盤となる社会の水準がそもそも足りないのだろう。これが人類に理解できるようになるには、あと百年か、千年か、あるいは一万年か……」

師匠の顔から、垣間見せた脆弱さとも、日頃の豪放さとも違う何かが覗いた。

「いずれにせよ、これの研究は時間ばかり吸い取って、何も実を結ばない可能性が高い。そんなものに、あの女の貴重な知性と時間を費やさせるのは人類の損失だ」

「僕の知性と時間を費やさせるのは人類の損失ではないと？」

「歩卒バイダクが女王マリカに勝れる点は、女王は使い惜しまざるをえず、ここ一番で活かしきれないのに対し、歩卒が惜しみなく前に出れるところだぜ」

歩卒バイダクも女王マリカもアツザフルシャトランジュにおける将棋ポーンの駒クイーンで、いわゆる歩兵と女王の関係に近い。

「そして、それ故に一介の歩卒が王を殺すことも多い……そんなところだ」

「……何だか、師匠、珍しく教育者っぽいこと言っていますね」

あるいはこれが狂王を放逐した巫術師でも、世界に隔絶した探究士でもない、教育者としてのミンガ||ラマなのかもしれない。そして、師匠はこの場にはいない凡愚への苛立ちを露わ

にし、その上で弟子を褒め称えた。

「世の中、女王が前に出ているのに、奥に引っ込んでいる歩卒が多い筈多い事。動かぬ歩卒に価値はない。しかし、貴様は前に出る歩卒かもしれん。ならば、価値ある歩卒だ」

この言葉、鵬翦が聞いていたならば、馴れ合いと言い、見下すだろうな——とアルイクシルは考え、先程のアルカマルの言葉の正しさを噛み締めた。

「僕は自分が歩卒だとは思いません。また、動かぬ歩卒とは己を王であると自負する気高さを持った者なかもしれませんが。が、自分が鵬翦に勝る可能性は低く、そして、また、その可能性が確実に存在していることも事実でしょう」そして、アルイクシルは屹然と拝礼を取る。「何より、俺は自らが王であつても、眼前で猛威を振るう女王をこの手で仕留めたく思います」

何か眩いものを見たかのようにミンガラマは自嘲気味に語った。

「もしかしたら、この杖を貴様に渡したことで、俺はあの女の才能に嫉妬した卑しい男として、後世罵られるかもしれない。だが、もし、貴様がこの杖の理を詳らかにできれば、俺は勇気を以って英断を下せる一流の教育者としても名を残せるだろう。まあ、頑張ってくださいよ」「なるほど」興が乗ったアルイクシルはせせら笑う。「師匠でも他人が気になるか……」

「……人間、歳をとると駄目だ。俺も貴様達の歳くらいの時はこの世のすべてを見下していたんだがなあ……」

「期限は？」

再び少年の目に昏い光が、決意の炎が宿る。異形の賢者も生来の磊落さを取り戻す。

「一生。真理の探究とはそういうもんだぜ」

「御意……!!」

なお、その杖の銘を《カムヌ》という。そのことに少年が気付いたのは少し後になってからだった。

しかし、この時からだろう。アルイクシル・デアウスが、藜の如き身丈を超える杖を手にし、賢者の証たる純白の外套を翻さ始めたのは。遅々と、しかし確実に歩みを進める姿を見せたのは。それは後に《黒衣の魔女》と対を成すことになる《白衣の賢者》の姿そのものだった。